キズナエピソード

遊部 いろは　5話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

花織が言っていた通り、

いろはとの付き合いは俺の想像通りにはいかなかった。

なんせ、いろははいつだっていろはだ。

自分の感覚に任せるままに、やりたいことをやってしまう。

その度にサポートに回る俺は、

もはや、彼氏というよりは、保護者だった。

そして――ある日。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//駅のホーム

［とびお］

今日は休日デート。

二駅先までショッピングに行った帰り。

ホームで電車を待っていた。

［女性］

「きゃー！」

［とびお］

向こうから、悲鳴があがった。

見ると女性が、「子どもが線路に落ちた」と

周囲に訴えている。

［とびお］

非常停止ボタン！

俺の脳はすぐさま答えを導き出す。

しかし、それがどこにあるかがわからない。

［女性］

「きゃー！」

［とびお］

そうこうしているうちに、再び悲鳴があがった。

見ると――いろはが線路に飛び降りていた。

［とびお］

「あの馬鹿、何やってるんだ！」

［いろは］

「とびお、早く！

上からこの子を引き上げて！」

［とびお］

俺はいろはから子どもを受け取ると、隣の人に手渡す。

そして、手を伸ばした。

［とびお］

「いろは、早く上がってこい！　電車が来るぞ！」

［いろは］

「ちょ、ちょっと待って、足が挟まって――」

［とびお］

「おい、お前、何やってんだ!?

早く――電車が！」

［男性］

「危ない、君も離れなさい！」

［とびお］

ホームから身を乗り出して手を伸ばすものの、

後ろの人たちによって俺は引き剥がされてしまった。

［とびお］

「いろはー！」

［とびお］

直後、電車がホームに到着した。

//暗転

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

……結果から言えば、いろはは無事だった。

ホームの下に作られていた空間に逃げ込んで、助かったらしい。

子どもの親からすごく感謝されたが、

駅員さんからはものすごく怒られた。当然と言えば当然だが。

そして今、最寄駅からの帰り道。

今度は俺がいろはを怒っていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［とびお］

「いろは……さすがに今回の行動は

褒められたもんじゃない」

［とびお］

俺が苦言を呈すると、いろはは頬を膨らませる。

［いろは］

「えーなんでー？

子どもの命を救ったんだよ!?」

［とびお］

「立派なことかもしれないけど、それだけじゃダメだろ。

自分の安全にも気をつけてくれ」

［いろは］

「んー。でも、結局あたしも無傷だったわけだし、

よくない？」

［とびお］

「よくない！

いろはは何もわかってない！」

［とびお］

俺はいろはの肩を掴むと、

真っ直ぐに彼女の目を見つめた。

［とびお］

「誰かが助かったって、

お前が危険な目に合うのを見たくないんだ！

もっと、自分を大事にしろよ！」

［とびお］

だが、俺の手はいろはに強引に振り払われた。

［いろは］

「危険だと思ったら、人を助けずに見捨てろってこと？

嫌だよそんなの！」

［いろは］

「あたしは間違ってない！

あの子は無事だったんだよ！

何が悪かったって言うの？」

［とびお］

「だから、そういう問題じゃないんだよ！」

［いろは］

「じゃあどういう問題!?

とびおのわからずや！　もう、知らない！」

［とびお］

いろはは舌を出すと、走り去っていってしまう。

［とびお］

バカいろは。わからず屋はお前の方だろ……。

俺はそう呟いていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END